

# 強者の戦略

東大日本史のみかた 41〔問題編〕

第 41 回となる今回は 2020 年の東大日本史の第 1 問を取り上げてお話をしていきたいと思います。さあ、しっかり問題を考えてみてください。

## 【2020 年度 東京大学 文科前期 第 1 問】

次の(1)～(5)の文章を読んで、下記の設問 A・B に答えなさい。

- (1) 『千字文』は 6 世紀前半に、初学の教科書として、書聖と称された王羲之<sup>おうぎし</sup>の筆跡を集め、千字の漢字を四字句に綴ったものと言われる。習字の手本としても利用され、『古事記』によれば、百済から『論語』とともに倭国に伝えられたという。
- (2) 唐の皇帝太宗は、王羲之の書を好み、模本(複製)をたくさん作らせた。遣唐使はそれらを下賜され、持ち帰ったと推測される。
- (3) 大宝令では、中央に大学、地方に国学が置かれ、『論語』が共通の教科書とされていた。大学寮には書博士が置かれ、書学生もいた。長屋王家にも「書法模人」という書の手本を模写する人が存在したらしい。天平年間には国家事業としての写経所が設立され、多くの写経生が仏典の書写に従事していた。
- (4) 律令国家は 6 年に 1 回、戸籍を国府で 3 通作成した。また地方から貢納される調は、郡家で郡司らが計帳などと照合し、貢進者・品名・量などを墨書した木簡がくくり付けられて、都に送られた。
- (5) 756 年に聖武天皇の遺愛の品を東大寺大仏に奉献した宝物目録には、王羲之の真筆や手本があったと記されている。光明皇后が王羲之の書を模写したという「楽毅論」<sup>がっきろん</sup>も正倉院に伝来している。平安時代の初めに留学した空海・橘逸勢も唐代の書を通して王羲之の書法を学んだという。

## 設 問

- A 中央の都城や地方の官衙から出土する 8 世紀の木簡には、『千字文』や『論語』の文章の一部が多くみられる。その理由を 2 行以内で述べなさい。
- B 中国大陸から毛筆による書が日本列島に伝えられ、定着していく。その過程において、唐を中心とした東アジアの中で、律令国家や天皇家が果たした役割を 4 行以内で具体的に述べなさい。